

全科協ニュース

URL <http://jcsn.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 ☎110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9857 Fax.5814-9898 平成15年7月1日発行（通巻第191号）

特集 博物館を支える支援組織

琵琶湖博物館の「はしかけ」制度と「フィールドレポーター」制度

琵琶湖博物館 専門学芸員 高橋 啓一

「はしかけ」制度

琵琶湖博物館を支える組織にボランティアと言う名前の制度や人は存在しない。それに類似するものに「はしかけ」制度と「フィールドレポーター」制度というものがある。

「はしかけ」の名は、琵琶湖地域の北の方で行われている仲人のような人をそう呼んでいることに由来する。つまり博物館と一般の博物館利用者を結ぶ高度な利用者としてイメージされた。

博物館の支援組織として通常使われるボランティアという言葉は、大変幅の広いものである。そのため同じ言葉でも、人によって意味がずいぶん違って来る。すでにある言葉を使うことでイメージがあいまいになってしまうのを防ぎ、また琵琶湖博物館の新しい活動の個性をはっきりさせるためにボランティアという言葉を使わずに「はしかけ」という名前を付けた。

「はしかけ」になるには特別な資格は必要ない。琵琶湖博物館の設立主旨や理念、博物館活動の実際を知る半日の登録講座を受講し、ボランティア保険に加入すれば登録が完了し、名札が渡される。登録は1年ごとの更新である。渡された名札は館内を自由に行き来するために使う。「はしかけ」がボランティアと違うところは、先に述べたように「はしかけ」が『最も高度に博物館を利用する人、博物館の利用について新たな世界を切り開く人』という使命を期待されている点である。たとえば「はしかけ」の登録をしても、その時点では「はしかけニューズレター」というのが送られてくるだけで何も起こらない。すでに活動が行われている「はしかけ」グループに入会するか、自分で新しいグループを立ち上げなければ何もしないまま1年が過ぎてしま

うことになる。

一般的に博物館には「資料・情報を収集保管し、研究し、人々の利用に供する事」や、「地域の文化の拠点」としての役割を期待されている。展示を見るだけでなく、あらゆる博物館活動に様々な人々が参加し、利用して行くほど博物館活動は充実する。「はしかけ」は、利用者として博物館活動を活発にさせ、充実させていくための開拓者なのである。

現在「はしかけ」には9つのグループがある。それらは、『うおの会』、『田んぼの生き物調査グループ』、『たんさいぼうの会』、『中世探検隊』、『体験学習の日グループ』、『植物の会』、『里山の会』、『ほねほねくらぶ』、『咽頭歯俱樂部』などである。

『うおの会（魚の分布調査グループ）』や『田んぼの生き物調査グループ』、『たんさいぼうの会』などは研究グループであり、参加者は野外での調査を中心にして琵琶湖地域の生物研究の一翼を担っている。また、『中世探検隊』や『体験学習の日グループ』などは企画展示の準備や運営を行ったり、交流行事サポートやプログラム開発などを行っている。『植物の会』は愛好者グループ的なもので、自分たちの勉強と観察会の運営を行っている。『里山の会』は当館の交流行事「里山体験教室」（年4回）の卒業生で構成されている。里山の現状をより深く理解し、回復の道筋を勉強することを博物館が呼びかけ、それに応えた人たちのグループである。『ほねほねくらぶ』や『咽頭歯俱樂部』は標本作製したり骨の化石をクリーニングしたりして、展示や研究資料の充実に努めている。

これらの会の多くは、博物館の学芸職員が主導で始めたものだが、「はしかけ」グループの中にはすでに独自に事務



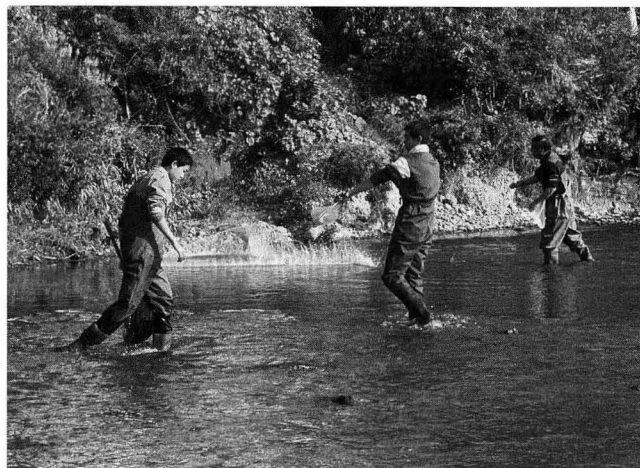
骨格を組み立て中の「ほねほねくらぶ」のメンバーたち

局を持ち、「はしかけ」が運営を切り盛りしているものもある。職員と「はしかけ」の両方がグループづくりや運営を積極的に行うようになること、「はしかけ」のグループや個人が博物館を飛び出し、地域でさまざまな活動を展開することが、博物館の思い描く将来像である。

「フィールドレポーター制度」

一方、「フィールドレポーター」制度は、滋賀県内の自然と暮らしについて、身の回りの調査を行い、定期的に博物館に報告をしていただくという「地域学芸員」のような制度である。任期は1年で、毎年3月後半に募集し、何年でも引き続き行うことができる。

調査は、博物館から送られてくる調査テーマや調査方法に沿って、情報や標本を博物館に送ることで行われる。こういった課題型の調査とは別に、「フィールドレポーター自身が自主的に行う「自由交流型調査」もある。これは、定期的に発行する「フィールドレポート掲示板」に、レポーターが情報や疑問、呼びかけなどを自由に投稿し、その投



野外で魚の分布調査をする「うおの会」のメンバーたち

稿に対して他のレポーターが情報や回答、意見を投稿するものである。

現在のところ年に数回のアンケート型の調査が実施されている。その成果は、フィールドレポーター自らが製作した展示物となって琵琶湖博物館の中で展示されてもいる。「フィールドレポーター」を運営して行くための各種の作業（データのとりまとめ、調査の運営、交流会の開催準備、ニュースレターの作成や発送など）は、レポーターの中からスタッフとして参加していただける方を募り、その方たちを中心に進めてる。

「はしかけ」も「フィールドレポーター」も琵琶湖博物館が目指している「地域だれでも・どこでも博物館」念頭においた制度である。つまり、博物館の活動が建造物としての博物館から外に広がり、それぞれの人が「私の琵琶湖博物館」を胸に持つようになることを目指している。今はまだ制度を試行錯誤して進めている段階であるが、琵琶湖博物館の中長期目標を達成するために、これからもこのような制度を充実していくよう努めている。

美術

は く 製

〈各 種 生 物〉
剥製・骨格標本・レプリカ
加工／販売／リース



有限 東洋近代美術研究所

製作所 〒272-0816 ☎047-337-5678
千葉県市川市本北方2-18-1 FAX 047-338-1978
本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25 ☎047-374-1564

ミュージアムの集客を強力にサポート
新たなコミュニケーションメディア【イベントナビ】

イベント情報ポータルサイト
EventNAVI
<http://www.eventnavi.ne.jp>

全国のイベント情報年間約10万件を発信するイベントナビ。
企画展・特別展などへの来場促進に、ぜひご活用ください。

イベント情報
無料登録受付中！

株式会社 乃村工藝社

本社：東京都港区芝浦4-6-4 〒108-8565 電話 03-3455-1171
ホームページ <http://www.nomurakougei.co.jp>

ディスプレイおよび建築の調査・コンサルティング
企画・設計・デザイン・プロデュース・演出・制作施工
ISO9001認証取得（文化環境カンパニー）ISO14001認証取得（MCカンパニー）

社会教育施設・県立博物館から誕生した日本初「NPO法人人と自然の会」

NPO法人人と自然の会 清水 文美



2003.03.16 第71回ドリームスタジオ

—— NPO法人人と自然の会の誕生までのプロセス

兵庫県立人と自然の博物館は「人と自然の調和した環境のあり方を学ぶ場」として1992年に開館しました。自然と人間活動にまつわる様々な事象を「常設展示」として紹介しているほか、人と自然に関する資料の「収集・保管」や、それらの基礎および応用分野における「研究活動」と「普及活動」を行っています。職員の大半は研究員ですが、兵庫県立姫路工業大学の附置研究所が併設されているため、研究員の過半数が大学教員を兼務する形となっています。

さて、開館から2年後の94年に「ボランティア養成講座」が開講。そして、第一期ボランティアが誕生し、人と自然の会の前身である博物館ボランティアとして活動を開始しました。

第1期登録から研究員の方々の助言、指導のもと、市民が自然とふれあい、自然をより深く理解できるよう、博物館と連携して体験学習プログラムなどを開発、実践してきました。活動開始から5年を経過した1999年10月。私達は、広く市民が自然のしくみを知り、人と自然の関わりについて考え、人と自然の共生についての理解を深めることを目的とした諸活動を博物館などと連携して行うために、「特定非営利活動法人人と自然の会」を設立しました。

現在会員は74名です。20代から70代までと幅広く、男女比はほぼ同じで、三田市内だけでなく神戸市、芦屋市、西宮市など県内のいろいろな地域から参加されています。顧

問などではなく、全員で役割分担しながら組織運営を行っています。

「みんなでつくる博物館」というキーワード

—— 市民参画としてのボランティア!?

ボランティア導入にあたっての博物館のコンセプトは、「ボランティアの自主性に任せる」というものでした。このコンセプトから、私達は「みんなでつくる博物館」というキーワードに出会いました。このことが、後に私達が博物館とより良いパートナーシップを結ぶ原点になりました。

その具体的なきっかけは「市民に博物館を身近に感じてもらう!」というコンセプトで開催した「第1回ミュージアム・フェスティバル」への参画でした。職員とボランティアと一緒に企画・運営にあたり、ボランティアが5つの自主イベントを実施しました。この経験から私達は「自分の気持ち次第でなんでもできる」自由さに気づきました。博物館からの「活動の場」の提供がボランティアに「創造する喜び」を呼び、新たな「想像力」をかきたてる原動力になりました。「市民」が「市民」と博物館を結ぶ架け橋となっていく自信と責任を感じたのです。

その後も博物館はボランティアについて、一人の担当者だけに任せず、ボランティア・コーディネーション・グループを結成し、さまざまな個性やニーズに対応することで、「ボランティアの自主性」の醸成を図りました。その結果、会の活動は博物館のわくを超え、新しい活動の場を外へへしずつ広げていくことができるようになりました。また、会の運営を自主的に行うことで、博物館の運営にも参画できるようなお互いを認め合えるパートナーとなり、様々な面で大きな相乗効果をもたらすことになりました。

博物館とのパートナーシップ

—— 協力協定書から得るもの

博物館ボランティアとしての5年間の活動により、私達は博物館と深い信頼関係を築くことができました。そして、今後も良きパートナーとして博物館内外での活動を協力して行えるよう、博物館と協力協定書を取り交わしました。



2002.04.27 たんぽぽカーニバル

この協力協定書は私たちの自立した活動を尊重するものであると同時に、博物館の情報、ノウハウなどの提供を通じて私達の博物館内外での活動をバックアップしてくれるものでもあるのです。

協力協定の締結から3年を経た現在、第3日曜日「博物館の日」のドリームスタジオは会の活動の主軸となり、第75回(2003.7.20実施)を迎え、来館者の子どもたちと楽しい時間を共有しています。他にも「はくぶつかんの先生と行く たんけん隊スペシャル(6日間セット)」・「市民植物観察会(春・秋)」・「ミツバチの不思議(子ども夢基金)」など様々な体験プログラムを展開しています。また、今年度は研究員から「自然について」というレクチャーを受け、兵庫県下の中学2年生が対象の「トライやるウィーク」を受入れ、中学生と一緒に「水辺の植生管理」を4日間実施しました。

—— 博物館(施設)と共有するもの

NPO法人になるまでの5年間は、市民との「時間の共有」のために博物館が私達に与えてくれた時間であったと思います。ボランティアをしようと集まった市民はお互い初対面でした。このような市民に対して、博物館の研究員の方々はいろいろな市民に対応する中で、また対話というごくシンプルな機会の中で、少しずつ市民が社会に還元できる何かを自分自身で見出せるように多くの時間をかけてくれました。その共有した時間は館側だけでなく、会員同士、また他の施設との交流を通し、私達を少しずつ育てていく時間となりました。自然についてのレクチャーや企画に対するアドバイスの時間も大切なものでした。一つの取り組みにこだわらず、違いを生かして進むためには、こ

の「時間の共有」が不可欠だと思います。

博物館開館10周年にあたる2002年11月に、育ててくれたお礼を込め、「スーパー・ドリームスタジオ〜ミュージアム・ボランティアからのプレゼント〜」を自主企画により開催しました。日本科学未来館のボランティア支援の共催を得て、中高生向けの「スペシャルミーティング〜君たちへ夢をのせて〜」と、全国からミュージアム・ボランティアが集まり、各活動施設と協力して行う「ボランティア・メッセ2002〜夢を追う大人たち〜」を同時開催し、10000名を超える来館者を迎えることができました。

輝きを求めて

—— ステキな大人に出会うため

今後もボランティア一人一人が自立し、「人と自然の会」としても自律することで、博物館や行政のパートナーとして、一緒に前進できるものと確信しています。

博物館に夢がある限り、私達も夢を追いかける大人として今後も博物館を活動の場として大いに楽しみながら、夢をつないでゆきたいと思います。

事務局：669-1544

兵庫県三田市武庫が丘5-2 C-303

TEL：090-1586-3851/FAX：079-559-4308

活動拠点：669-1546

兵庫県三田市弥生が丘6丁目

兵庫県立人と自然の博物館 ボランティアルーム

TEL：079-559-2003/FAX：079-559-2033

自然史フェスティバルの開催と大阪自然史センター

大阪市立自然史博物館 山西良平・佐久間大輔

現在、博物館界に求められている大きなテーマは、市民参画であり、内外とのパートナーシップであると言われている。これは、日本博物館協会の「対話と連携」路線に示されているような国の博物館行政的課題であると同時に、大阪市立自然史博物館（以下当館と略す）の場合は設置者である大阪市からの要請でもある。

市民参画を実現するためには、それを担う人材を募集し、育成しなければならないのは当然のこととして、そのような人々が活躍できる「場」を整備することも同等に重要である。そのような「場」が当館の場合は博物館友の会を母体とした NPO である大阪自然史センターであると考えられる。

自然史フェスティバルの開催

今年（2003年）3月21～23日、初めての「大阪自然史フェスティバル」が当館を会場として開催された。「自然派市民の文化祭」と銘打ったこのイベントには、大阪を中心とした近畿地方各地の自然保護、自然観察などに関わる85もの団体が集結した。予想をはるかに超える団体数のために、当初会場として予定していたいわゆるイベントスペースであるネイチャー・ホールと講堂のみならず、常設展に組み込まれた空間であるオリエンテーション・ホール、ポーチ、旧特別展示室なども含め、博物館が活用できる限りの空間を提供するという、博物館としても前代未聞の行事となった。関係者・スタッフの奮闘の結果、プログラムは円滑に



ポーチでのイベント

進行し、無事終了した。それぞれの出展・参加団体の構成員は大阪のナチュラリストの中核ともいえる存在であり、ブース展示での活動紹介や発表会、夜の懇親会など種々の企画を通じて互いに刺激し合い、交流を深める又とない良い機会となったようである。今後の大阪の自然史科学の普及において一つの転換点になる可能性を持っているだろう。折悪しくイラク戦争の開始と重なったためマスコミの報道には恵まれなかったが、ポスター・チラシの配布による事前の広報の成果もあって、団体関係者とは別に当館友の会会員や一般市民も多数訪れた。団体構成員、一般市民を合わせた3日間の参加者は延べ2万人と推計されている（佐久間、2003及び橘、2003）。

大阪自然史センターの登場

この大阪自然史フェスティバルを主催したのは、ここで紹介する「特定非営利活動法人大阪自然史センター」（以下、自然史センターと略す）である。一昨年に発足したばかりの自然史センターの名が世に出たのは、実質的にこのイベントが最初であり、周囲の認知を得る機会でもあった。フェスティバル企画の経過は佐久間(2003)に詳しいが、元々は文部科学省が全国の科学系博物館及びその連携組織に募集をかけて選定・委託している「科学系博物館教育機能活用推進事業」を、当地で自然史センターが受託したことに始まっている。自然史センターでは申請時に当館と協議の



ネイチャー・ホールでのブース展示。参加団体の交流の場となった。

上、これを「自然史博物館を拠点とした学習ネットワーク推進事業」として具体化した。その内容は地域との連携と学校教育への支援を柱としたものであり、自然史フェスティバルの開催は前者に関する目玉事業であった。

旧来より当館では友の会を母体として、さまざまな分野の研究サークルが産み出され、学芸員の指導と援助のもとに独自の活動を積み重ねてきている。一方、それらとは別に地域で活動している自然保護、自然観察を目的としたサークル・団体が多数あり、当館とつながりのあるものもあれば、ほとんど付き合いのないものまでさまざまである。これらの各団体は日常的に単独で活動していることが多く、相互に交流する機会をあまり持たない。この点に着目して今回のフェスティバルは企画され、大きな成果を収めたと言える。この成果は今後の友の会活動にもフィードバックされ、活性化の原動力となっていくであろう。博物館と地域の自然活動団体との絆ももちろん太くなった。

自然史センターの役割

自然史センターは特定非営利活動促進法に基づく、いわゆる NPO 法人である。法人の定款においては「本法人は、広く自然史科学の発展と普及にとり組み、大阪市立自然史博物館の事業の進展に寄与することを通して、市民の自然に対する理解を深めることを目的とする」（第3条）と、当館との関係性を明確にしている。法人格を得たのは2001年9月であり、当館としても設立に密接に関わってきた経緯がある（山西、2001）。母体となった「大阪市立自然史博物館友の会」は、50年の歴史を持つが、残念ながら任意団体であり、専属スタッフの雇用にも苦勞する状況が長く続いていた。法人化により、こうした状況を打破し、これまで友の会に集まっていた多くの人材が積極的に活躍できる屋台骨が整ったともいえる。実際、大阪自然史フェスティバルを始め、現在当館が行っている様々な事業には、NPOのメンバーが大きな役割を果たしているものが多い。ここには、必要かつ可能な場合にはこれらの人材を無給のボランティアではなく、ボランティアではあるが有給の職員として抱える事のできる NPO 組織の利点があり、継続的な取り組みを可能にしている。

もちろん、大阪自然史フェスティバルを実施するにあたっては、当館も全力投球した。そして、博物館の保有する物的資源である会場施設と、人的資源である学芸員の多面

的な能力（専門知識のみならずイベントの企画力、人的コーディネーターとしての力、ブース展示等のノウハウ、さらに労力提供等のサービスに至るまで）がフルに活用された。

しかし、もし博物館ひとりがこのようなイベントを企画していたらどうなっていたであろうか？ 昨年秋からという短い準備期間において当初40程度と予測していた参加団体数が85にまで増えるというめまぐるしい展開があり、また博物館学芸員のみならず外部のさまざまな立場の人々が主体的に参画する中で、局面に対応した柔軟な企画・運営と予算執行ができたかどうかという問題がある。これらの点では、今回は自然史センターが文部科学省からの委託事業費を獲得したことによって金銭的・物質的裏付けが得られ効率的な運用ができた。そしてこの委託事業のために自然史センターが雇用した「教育スタッフ」が終始イベントを支えたことは特筆に値する（橘、2003）。また、友の会役員を中心メンバーとする自然史センター会員は、準備や当日の要員としての任も含めて、総出で主催者としての役割を果たした。ひるがえって、呼びかけを受けたサークルや団体の目線から見ても、一面において大阪市という行政の出先機関である博物館から声がかかるよりは、NPO という意味では共通の基盤のある自然史センターからの方が、気軽に参加できるというメリットもあったのではないだろうか？ このように、自然史センターは博物館単独ではおそらく困難であったと考えられる地域の自然活動団体との連携企画を、自ら主催することによって成功させ、まさに博物館を支える支援組織としての役割を果たしたのである。

今後の自然史センター

設立当初、自然史センターの事業は定款において次の5項目と定められた。

- (1) 友の会事業
- (2) ミュージアム・サービス事業
- (3) ボランティア事業
- (4) 出版事業
- (5) その他

その際、友の会が自然史センターひとつの事業組織として位置づけられ、友の会自身の意志決定も経て翌年に合流した。当館では長年にわたって友の会に普及教育活動の軸足を置き、その育成と指導に携わってきた（山西、1993）。

当館友の会の場合、その基本的性格はあくまでも「博物館を利用しながら自然と親しみ、学習を深める」という、市民の学習組織である。このたびの経過の中でも、このような友の会の性格は尊重され、継承されている。

一方、本稿でとりあげているような、博物館のパートナーとして事業に積極的に関与・参画する意志を持った人々に対しては、自然史センターが事業の幅をさらに広げることによって、多様な活動の場を提供することが求められているのではないだろうか？自然史フェスティバルに結集したエネルギーは、自然史センター発展の計り知れない可能性を示唆しているように感じる。

文献

佐久間大輔 (2003) 報告2003.3.21-23大阪自然史フェスティバル。Nature Study、49 (5) : 58-60。

橘麻紀乃 (2003) 報告2003.3.21-23大阪自然史フェスティバル・楽屋裏編。Nature Study、49 (6) : 69-70。

山西良平 (1993) 大阪市立自然史博物館普及教育活動の系譜。大阪市立自然史博物館館報、(18) : 1-4。

山西良平 (2001) 「NPO 法人 大阪自然史センター」発足！。Nature Study、47 (10) : 116-117、(11) : 127-128。

歴史体感

ロボットが誘う、歴史伝説の世界

伝統文化の保存と伝承を目的とした施設、建設にも積極的に参加しております。



◀閃光に驚き、バランスを失う武士たち。



▲刀が振り下ろされるその瞬間、目が眩わんばかりの閃光が走る。

佐渡歴史伝説館／日蓮聖人 佐渡法難

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・設計・制御演出・施工

kokoro
株式会社 ココロ

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
TEL : 042-530-3939 FAX : 042-530-4050
<http://www.kokoro-dreams.co.jp/>

米サイエンセンターで、小学生を対象にナノの世界を紹介した企画展を開催中

既にこのコラムでも紹介したことがある、ニューヨーク州イサカのサイエンセンター(全科協ニュース32:4 2002年7月1日)で、ナノ・バイオテクノロジーをテーマにした企画展『それはナノの世界だぜ』が2003年4月12日から開催されている。同展は、5才から8才までの子どもを対象に、微粒子(ナノ粒子)のようなどとも小さなものと、科学者達がそれらを観察するのに使っている本物の器械を紹介している。全米科学基金(NSF)からの助成を受け、そして地元のコーネル大学のナノ・バイオテクノロジー研究所からの全面的な学術協力と、さらに地域通貨「イサカアワーズ」を交換に地元の多くのボランティアからの「労働力」を買って完成したこの企画(232m²)は、向こう5年間をかけて全米各地の科学館にレンタル(3ヶ月で45,000ドル)で貸し出されることになっている。同展の展示設計は、イサカを活動の拠点にしているペインテッド・ユニバース社。同社の代表であるトム・ロックウェル氏はユニークなキャリアをもった人物として知られている。ブラウン大学でデザインを学んだロックウェル氏は、フィラデルフィアにあるフランクリン科学博物館と自然科学アカデミーで展示デザイナーとして活躍した後、イサカに移住して地域住民が参加する市内の公園とサイエンセンターの改装に関わってきた。It's a Nano World. 2003年8月末まで

<http://www.sciencenter.org/>

<http://www.itsananoworld.org/>

<http://www.nbtc.cornell.edu/>

<http://www.painteduniverse.com>

アメリカ自然史博物館に、シロナガスクジラが戻ってきた!

ニューヨークにあるアメリカ自然史博物館では、2002年1月以来、改装工事が行われていた海洋生物の展示ホールが漸く2003年5月14日に再オープンし、多くのファンによって再会が待ちこがれていた雌のシロナスクジラの実物大レプリカ(全長28.65メートル、重量9525キロ)が、大々的なお色直しをして戻ってきた。もともとのレプリカは、1969年に海洋生物展示ホールがオープンした時から今回の改装前まで天井からつり下げられていたが、今回の改装で目と尾に修正が加えられ、また新たにヘソ等も加えられた。こ

れらは1969年に制作された際、正確さが見過ごされた部位であった。シロナガスクジラの生態は未だに多くの謎に包まれているが、最初にこのレプリカができた30数年前から現在に至るまでの間に、多くの新しい科学的な発見があり、それらの成果が今回のお色直しに活かされた。目をはじめ、鼻孔、尾羽は、すべて正確なために修正され、また皮膚も生体に近い色に塗り直された。

シロナガスクジラを目玉展示として大々的な更新がされた海洋生物展示ホールは、この改装工事の代表的なスポンサーの名前をとって、「ミルスタイン海洋生物ホール」(Irma and Paul Milstein Family Hall of Ocean Life)と名付けられた。ミルスタイン夫妻は総工費2500万ドルのうち、1500万ドルを寄付した。(他のスポンサーは、スイス第二の損保会社スイス・リーとニューヨーク市)

広さが2694m²の新しい展示ホールでは、新たに極地圏の海洋、巨大褐藻類の森、珊瑚礁や海底における生物の生態を紹介している。また極地に生息するホッキョクグラにあるプロテインの一種が血液の凍結を防いでいることに、植物遺伝子学者が着目し、冷凍庫で凍らない野菜や果物の開発に応用している研究も紹介されている。

米国の常設展示や展覧会は、スポンサーの意向も尊重していることが多いが、スポンサーのひとつであるスイス第二の損保会社であるスイス・リー社の意向も展示の中で反映されている。「洪水をはじめとする自然災害はさまざまな降雨パターンが原因になっており、もとを辿ると海洋に行きつく。言い換えると、われわれが大いに関心をはらっている損害リスクにも大きく影響しているのだ」と、同社の副会長デイドレ・リットルフィールド氏は述べている。

<http://www.amnh.org/exhibitions/permanent/ocean/>

アメリカ自然史博物館で、アインシュタイン展が開催中

この夏にニューヨークをへ行く機会があったら、ニューヨーク自然史博物館で開催中のアインシュタイン展『Einstein』は必見である。

同展では、アインシュタインの生涯と業績を紹介している。また最近多くのアメリカの博物館で見られるように、常設展や開催中の展覧会を見終わった来館者のためにホームページを使って、さらに詳しくアインシュタインについ

て学べる学習支援情報が pdf ファイルなどで用意されている。それらは、学校の生徒だけでなく、全米だけでも200万人を超えているといわれているホームスクーラーが、家庭でもできる実験を通じて、アインシュタインや相対性理論について深く学びたいという学習意欲に応えるようになっている。会期：2003年7月23日まで。

<http://www.amnh.org/exhibitions/einstein/>

2003年5月31日に運行を停止した超音速旅客機の行方

既にテレビのニュースや新聞等で報道された通り、超音速旅客機「コンコルド」が、運行会社であるエアフランスと英国航空の両社によって、運行が2003年5月31日をもって終わった。維持費の高騰、燃料消費の経済性、7000ドルという高い座席料金からの市場離れが運行中止の原因だ。

早くも5機を所有しているエアフランスは、それらをアメリカ、ドイツとフランスにある博物館等に寄贈することになっている。アメリカではワシントンDCの国立航空宇宙博物館に、そしてドイツではスバイヤールの技術博物館に行き先が決まっている。フランスではパリ近郊のル・ブルージュの航空宇宙博物館に、そしてもう1機はフランスの航空機メーカー「エアバス」がトゥールーズでつくった航空博物館に行くことになった。残りの1機は、パリのシャルル・ドゴール空港で展示されることになっている。英国航空でも博物館への寄贈が決定されているようだが、その行き先がまだ明らかになっていない。

米国国立医学図書館で、解剖学の歴史を紹介した企画展が開催中

ワシントンDC近郊のベセスダにある米国国立医学図書館は、医学史関連の蔵書は世界最大であると言われている。そのうちの解剖学の歴史に関連した蔵書を使って、1500年から現在に至るまでの解剖学の発展が企画展『Dream Anatomy』が開催されている。会期：2003年7月31日まで。

<http://www.nlm.nih.gov/exhibition/dreamanatomy/>

ロンドン科学博物館で、新三種混合ワクチンを紹介した企画展を開催中

1989年から93年にかけて、新三種混合（MMR）ワクチンを接種した子どもの中で、発熱や嘔吐、けいれんなどを伴う髄膜炎の副作用が発症した。その結果、死亡したり、重い障害を残す事故が発生した。そして、死亡あるいは後遺症を残したケースのうち、大阪、兵庫、岩手の3府県の

計3人の子どもの遺族や家族が、国と製造元を相手どり、約3億5000万円の損害賠償を求めた訴訟の判決が、2003年3月に大阪地方裁判所が出された。この中で、国と製造元に対し、大阪地裁は、3人のうちの2人に関して、障害とワクチンとの因果関係を認め、損害賠償金を支払うよう命じた。

欧米でも新三種混合に対する関心が高い。にもかかわらず、今まで博物館で面と向かってこれを取り上げることに消極的であった。しかしようやく最近になって、新風が吹き始めたようだ。

ロンドン科学博物館で、開催中の『The MMR files』展は、その一例だ。同展では、新三種混合（MMR）ワクチンの危険性と、イギリスで起こった同様の事故について紹介している。また同館では、会期中にこの企画展を見に来れない人のために、インターネット版のオンライン・エキジビションを公開している。こちらの方は、同展の展示内容と同じものを伝えるだけでなく、ブロードバンド対応のストリーミング映像を使って、同展を企画した担当者による、新三種混合ワクチンの危険性を指摘しているアンドリュー・ウェークフィールド医師、行政、被害家族のインタビューも紹介している。会期：2003年8月31日まで。

ロンドン科学博物館で、一般人の健康管理に対する考え方の変遷を紹介した企画展が開催中

自明の通り、人間社会で医学に頼る歴史は長い、それと平行して医学に頼ることなく、なるたけ自分で疾病を治したり、あるいは病気になることを予防する目的で健康の自己管理を行う歴史もまた長い。いい例が、中国で古くから伝わる八段錦や300年の歴史がある太極拳。あるいは気功がそうである。いずれも予防医学の手段として用いられ、発展してきた。

ロンドン科学博物館で開催中の企画展『Treat Yourself』は、過去300年にわたって、主に西欧社会において人々がどのように自分で健康管理をしてきたかを紹介したものである。同館の収蔵品とウェルカム医学財団の図書館の蔵書の中から、古書、手記、絵画、パンフレットや日常品等が紹介されている。会期：2003年5月23日－9月14日。

<http://www.sciencemuseum.org.uk/exhibitions/treatyourself/index.asp>

<http://www.sciencemuseum.org.uk/antenna/mmr/>

* (やすい・りょう) E-post: RGYasui@obirin.ac.jp

7月8月の特別展

開 催 館	展 覧 会 名	開催期間
陸前高田市立博物館	夏の特別展「陸前高田の化石展」	7月26日～8月31日
仙台市科学館	特別展「冒険・恐竜ワールド～よみがえれ！太古の支配者たち～」	7月20日～8月24日
ふくしま森の科学体験センター	特別企画展「電気と光のおもしろ実験工房」	4月15日～8月31日
	夏休み企画展「オーロラ・マルチ・スライドショー」	7月19日～8月24日
栃木県立博物館	企画展「トンボー日本人に愛されてきた水辺のハンター」	7月13日～9月15日
	自然系テーマ展「足尾銅山と写真師小野崎一徳」	7月20日～11月3日
	人文系テーマ展「栃木の平野のくらし（畑作）」	4月27日～9月15日
	人文系テーマ展「巡回展 栃木の遺跡－最近の発掘調査の成果から－」	7月13日～9月15日
群馬県立自然史博物館	第19回企画展「ファール昆虫記の世界」	7月19日～9月7日
群馬県生涯学習センター少年科学館	児童生徒理科研究作品展	7月26日～8月16日
	夏休みサイエンスウィーク2003	7月29日～8月3日
狭山市立博物館	企画展「博物館からケースが消えた!? さわってあそぼう！木のおもちゃ」	7月12日～9月7日
埼玉県立自然史博物館	企画展「夏休み！自然の調べ方」	7月12日～9月23日
我孫子市鳥の博物館	企画展「鳥の羽のふしぎ」	6月28日～9月28日
千葉県立現代産業科学館	「スポーツの科学－知ろう！さわろう！ためしてみよう！－」	7月19日～8月31日
国立科学博物館	特別展「江戸大博覧会－モノづくり日本－」	6月24日～8月31日
	特別展「THE 地震展」	8月1日～10月26日
	特別企画展「2003夏休みサイエンススクエア」	8月1日～8月24日
国立科学博物館附属筑波実験植物園	「海の植物展」	7月19日～8月10日
機械産業記念館	「次世代カーとITホーム～日本発エコ&ユビキタス技術」 PART III	4月9日～7月25日
たばこと塩の博物館	特別展「夏休み塩の学習室 Dr.ソルトの冒険島」	7月19日～8月31日
目黒寄生虫館	特別展「エキノコックス症」	4月29日～9月28日
多摩六都科学館	「ドキドキ・ハラハラ科学のおばけ展」	7月19日～8月31日
三菱みなとみらい技術館	特別展示「STOP！地球温暖化 ぼくらはみんなエコレンジャー！」	3月18日～9月28日
馬の博物館	テーマ展「ひづめ、わらじ、蹄鉄」	6月7日～7月27日
	テーマ展「ドーミエの諷刺画」	6月7日～7月27日
横浜こども科学館	夏休み特別展「いきものバンザイ!!－今も生きてる化石たち－」	7月19日～8月31日
横須賀市自然・人文博物館	企画展示「ウミウシ」	6月1日～7月27日
	企画展示「三浦半島の蛾」	8月1日～11月23日
	特別展示「近代日本外交の始まり－ペリー来航から万延遣米使節への歩み」	8月1日～12月28日

開 催 館	展 覧 会 名	開催期間
神奈川県立生命の星・地球博物館	特別展「侵略とかく乱のはてにー未来へつなげる自然とはー」	7月19日～9月15日
糸魚川市フォッサマグナミュージアム	夏季特別展「ふしぎな石展」	7月19日～9月15日
	夏季特別展「ニュートリノ展」	7月5日～9月7日
新潟県立上越科学館	特別展「昆虫大行進」	7月26日～8月17日
黒部市吉田科学館	特別展「黒部の自然3ー黒部の魚ー」	6月7日～8月31日
富山市科学文化センター	特別展「からくり」	7月17日～9月15日
佐久市子ども未来館	夏の特別展「科学実験大集合!!」	7月5日～8月31日
立山カルデラ砂防博物館	企画展「自然をまねるー実験集合」	7月17日～8月31日
中津川市鉱物博物館	第7回企画展「飯盛里安博士97年の生涯ー放射性鉱物研究の先達ー」	8月3日～11月23日
瑞浪市化石博物館	特別展「1600万年前の日本ー北にあがった熱帯の海ー」	6月15日～8月31日
静岡市立児童会館	「青少年のための科学の祭典2003」第7回静岡大会	8月17日
東海大学自然史博物館	特別展示「トビウオの赤ちゃん」	7月2日～8月31日
	特別企画「ふれて・みて 海の生きものたち」	7月20日～8月24日
	特別企画「夏まつり縁日水族館」	8月10日～17日
ディスカバリーパーク焼津	特別展「光のワンダーランド2」	7月17日～8月31日
名古屋市科学館	特別展「手で考える!?木組みからくり展」	7月19日～8月31日
トヨタ博物館	企画展「親子で楽しむクルマランド」	7月18日～9月21日
	ギャラリー展「フランス車」	7月15日～10月13日
伊丹市昆虫館	「虫はしぜんのビックリ箱～きみのとなりの?虫!虫～」	7月16日～9月8日
兵庫県立人と自然の博物館	ミニ企画展「ホテルのお部屋」	5月18日～7月13日
	企画展「採集に出かけよう!ーたのしい標本づくりー」	7月12日～8月31日
明石市立天文科学館	「火星探査の歴史展」	7月1日～8月31日
鳥取県立博物館	特別展「世界どうぶつ物語ー動物地理学で語る鳥取から世界までー」	7月20日～8月24日
島根県立宍道湖自然館	第5回特別展「鉄魚・銀魚・金魚・出雲なんきん」	7月19日～8月31日
防府市青少年科学館	夏休み特別企画 青少年のための科学の祭典「おもしろサイエンス in ソラール2003」	7月24日～8月27日
あすたむらんど徳島子ども科学館	第8回企画展「科学忍者展」	7月17日～8月31日
愛媛県立博物館	テーマ展「河原の石(肱川流域)」	6月1日～7月27日
	特別展「化石からさぐる第四紀の瀬戸内海」	8月1日～21日
愛媛県総合科学博物館	特別展「わくわく!エネルギー体験館」	7月12日～8月31日
福岡市立少年科学文化会館	特別企画展「絶滅したほ乳類展」	7月19日～8月10日
福岡県青少年科学館	特別展「ブラック城の冒険」～おばけの城のふしぎ体験～	7月19日～8月31日
佐賀県立博物館	自然史テーマ展示「生き物のふしぎを見よう」	7月15日～9月18日
鹿児島県立博物館	特別展「児童・生徒の理科研究・作品展」	7月19日～8月31日
沖縄県立博物館	企画展「新収蔵品展」	6月10日～7月6日

全科協情報

[平成15年度 東レ理科教育賞]

対象：中学校・高等学校レベルでの理科教育における新しい発想と工夫考案に基づいた教育事例

応募締切：9月30日（火）（必着）

問い合わせ：（財）東レ科学振興会 Tel:047-350-6104

e-mail:JDP00117@nifty.ne.jp

<http://www.toray.co.jp/aboutus/tsf/kagaku.html>

[財福武学術文化振興財団 平成15年度研究助成]

助成対象の分野：歴史学・地理学の分野における自然科学的研究

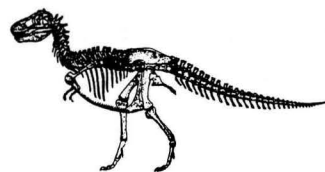
助成期間：平成16年4月より1年間

応募締切：平成15年9月30日（火）（当日消印有効）

問い合わせ：同財団事務局 Tel:042-356-0810

<http://www.fukutake.or.jp/science/top/index.html>

※世界の化石・
鉱物・恐竜・化石
人類・動物骨格
標本及び模型の
輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 **ゼネラルサイエンス**
コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

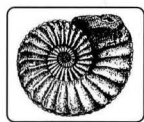
より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。

株式会社丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡
URL <http://www.tanseisha.co.jp>

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本(化石・鉱物・岩石)
古生物関係模型(レプリカ)

大英博物館/恐竜復元模型

●常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)

髯東京サイエンス

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745

<http://www.tokyo-science.co.jp> E-mail:info@tokyo-science.co.jp



INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT

ONY KOBO CO., LTD.

東京都千代田区神田神保町2-7-3 シグマ神保町4階
TEL (03) 3221-1102代 FAX (03) 3221-1185



動物園/水族館/博物館
企画・設計・施工

省スペース展示に最適な、小型ドームCG映像システム

メディアグローブ、誕生

メディアグローブは世界で初めてフルカラー
投映を可能にした小型・高精細のデジタル
プラネタリウム。さらにドーム全天に高画質な
CG映像を投映するマルチ投映機能を持ち、
さまざまなシーンで活躍します。

▶各種イベント等にも対応。レンタルもご相談ください。



ISO 14001 認証取得

ミノルタプラネタリウム株式会社

〒108-0074 東京都港区高輪2-19-13 TEL.03-5423-7571
〒442-0067 愛知県豊川市金屋西町1-8 TEL.0533-89-3570
〒569-0807 大阪府高槻市桜町1-2 TEL.072-685-1011
<http://www.minolta.com/japan/mp/index.html>



全科協ニュース編集委員会

NHK放送博物館 チーフディレクター

河野光子

滋賀県立琵琶湖博物館 企画調整課長

高橋啓一

ミュージアムパーク茨城県自然博物館

資料課長 國府田良樹

独立行政法人国立科学博物館 展示・情報部情報サービス課長 井上透

独立行政法人国立科学博物館 展示・情報部情報サービス課専門職員原田紀子

全科協事務局

国立科学博物館 展示・情報部情報サービス課 村上 剛

Tel.03-5814-9857 Fax.03-5814-9898

発行日 平成15年7月1日

発行 全国科学博物館協議会©

〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社